

現段階では、スウェーデンの運動教育の実態もこの程度のものであるが、男女のレベルを考えれば、いまは、男性にもリズミカルな運動になれてもらうことが目標なのかもしれない。少くとも、日本の男子学生よりは、はるかにリズミカルな身のこなしをしており、動きにも表情がある。

いまスウェーデンでは、競争意識をあおるようなスポーツはやめようという動きが高まっており、エリート・スポーツのあり方に対する批判が社会的な問題になっている。そのような状況のなかで、運動内容は運動の楽しさ、運動の質を求める方向へと移っているのである。

スウェーデンの教育（体育）は、実に着実なあゆみで進んでいるという実感をもった。

いずれにしても、欧米主要国においては人間の表現運動としての運動は、人間の本質を見失うことなく、人間生活を豊かにし、人間の生活をよりよくする方向で進められているのである。

## 第5章 わが国の体育の実態から

### （1）スポーツと体力

戦後、わが国の運動文化の形態は、すっかりアメリカ的になり、世界中のあらゆるスポーツが輸入され、狭い空間、貧しい施設など悪条件のなかで、ひたすらオリンピックをめざす、選手養成のためのスポーツだけがクローズ・アップされている。

学校体育においても、そのあたりを受けて、あらゆるスポーツ種目がとり入れられている。このため生徒たちは、スポーツを楽しむという基本姿勢も、技術の定着もないままに終ってしまうというのが現実である。

わが国の学校体育においては、運動教育の位置づけは確立されて居らず、体操・スポーツ・ダンスの領域それぞれが、独自の運動内容を行うことだけで成り立っている。

しかし、それぞれの領域には、それに問題を含んでいる。スポーツの問題点は、スポーツがいくばくかの動きをもつてることだけで満足しているということ。そして、ダンスの問題点は、わが国では、伝統的にダンスは女・子どものやるものという感覚があり、男性は勇ましいスポーツさえやっていればよいという考え方方が定着している。したがって、男性の指導者は大半がダンス、リズミカルな運動に対しては、全く無関心である。

外国の男性の体育指導者たちが、リズミカルな動きをし、楽しそうに踊るのをみると、わが国の体育全般の運動概念に問題があると感じざるを得ない。

そして、わが国の体育の歴史上、最も伝統的な種目は「体操」であるが、いまだに導入当時の体操（スウェーデン体操）のイメージからのがれられずにいる。号令に合わせて、全身に力をこめ、直線的に力強く、一本調子の運動が「体操」なのである。力を抜くことやなめらかな曲線的な運動は運動としての効果をもたないと想いこんでいる人、なよなよした運動は女性っぽくてい

やだという、偏見に満ち満ちている人（指導者）が、まだまだ多いのである。

最近では、体操は体力づくりの運動種目として、プログラム内容も豊富になり、社会体育の場においても、ジャズ体操、エアロビクス体操などいま大盛況である。

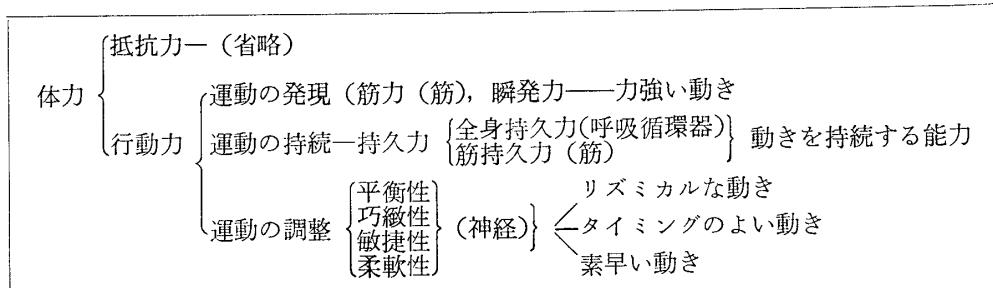
文部省で示している体育の目標（基本方針）の重点は「健康の増進と体力の向上を図ること」とされている。

それでは、その体力とは何か？

次の表は、一般に広く用いられる体力の要因の構成の表である。

第18表

小学校指導書体育編（1969）



この表には、体力の要因と「動き」の要因を結びつけて、その関係を示している。つまり、筋力・瞬発力は力強い動きに結びつき、持久力は動きを持続させる能力の動きとし、平衡性・巧緻性・敏捷性・柔軟性はリズミカルな動き、タイミングのよい動き、素早い動きと結びつくというものである。

この「動き」というのは、どういう運動（行動）内容から導き出されたのか不明確であるばかりでなく、リズミカルな動き、タイミングのよい動き、素早い動きが調整力を高めるという結びつけ方にも問題がある。

こうしてみると、現行の体育で扱う「動き」には、なめらかな動き、ながれるような動きはとりあげられていない。そして、力強い動きを重視するばかりで、エネルギーをコントロールした弱い力の動きは考えられていないのである。ながれるような、力の弱い動きは、ダンスで行えばよいと考えているのか、それとも、人間の体力に軟弱な動きは不必要とでも考えているのだろうか。

しかし、スポーツ運動の場面では、力のコントロール、急激な変化に対応する能力はきわめて重要な内容である。

わが国の体育の実態から、2～3の問題点をとりあげてみたが、要するに、なぜスポーツをするのか、一体、人間生活にとっての体力とは何か、体育において、いま最も重要視しなければならないことは何かなどについて、十分検討してみる必要がある。そして、いたずらにスポーツ種目の羅列に終らないよう、種目・内容の吟味、選択の調整に努力すべきだと思う。